

History of Fussa City

悠遠な時の流れにはぐくまれたまち

時を刻んで

原始・古代

福生に、人々が生活を営むようになったのは、およそ1万年前と推定されています。市内の福生不動尊遺跡からは縄文時代早期の土器が出土しています。また、縄文時代中期（約4,000年～5,000年前）になると、

拜島段丘に人々の暮らしが大規模に営まれていたようで、特に長沢遺跡には集落跡も発見されています。

弥生時代・古墳時代になると、人々は福生を離れて生活に適した土地へ移りはじめたものと思われ、この時代の遺跡や遺物は現在のところまだほとんど発見されていません。

律令制下では、武蔵国多摩郡に属していましたが、『和名抄』にみえる多摩郡10郷のうち、福生市が属していたと推定できる郷は、定かではありません。ただ熊川地域で平安時代の土器が出土しているだけです。

福生が歴史にその名を見せたのは、11世紀に入ってからのこととされています。武蔵七党・西党の小川氏系図の中に宗末という武士が、福生村を賜ったことが記されています。



深鉢型土器（縄文時代、長沢遺跡出土、市指定文化財）



しょう油つくりの道具

鎌倉時代-戦国時代

中世の歴史を物語る文化財として、板碑（供養塔）が数多く発見されています。嘉元2年

（1304）と記された板碑が、永昌院に残っており、市内に現存する石の文化財では最古のものです。

室町時代になると、八王子城主北条氏照が支配するようになります。永禄4年（1561）には福生郷内での乱暴を禁止する制札が発行されています。しかし、5代にわたって関東一円に勢力をふるった北条氏も、豊臣秀吉に滅ぼされ、やがて徳川家康が入ってきます。

室町時代になると、八王子城主北条氏照が支配するようになります。

永禄4年（1561）には福生郷内での乱暴を禁止する制札が発行されています。しかし、5代にわたって関東一円に勢力をふるった北条氏も、豊臣秀吉に滅ぼされ、やがて徳川家康が入ってきます。



牛浜出水の図（江戸時代、藤雲嶺作、渡辺治衛氏所蔵、市指定文化財）



嘉元4年銘板碑（鎌倉時代、福生院）

江戸時代

江戸時代に入ると、福生村は天領に、熊川村は天領、旗本領に分かれて統治されるようになります。

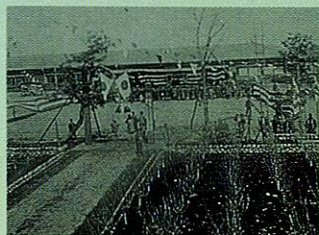
『新編武蔵風土記稿』によると、江戸時代の福生村は、東は中里新田および殿ヶ谷戸村、南は熊川村、西は多摩川を隔てて下草花村、北は川崎、石畑に接する村で東西約30町（3.3km）、南北22町（2.4km）ほどありました。正保（1644～1647）のころまでは畑地が中心でしたが、その後、水田も新たに開発されるようになりました。農家では野良仕事の合間に、男は多摩川のいかだ流しや漁業などを営み、女は機織りをしていたといえます。

また、熊川村は段丘上に発達したため、耕地のほとんどが畑でした。そのため、水田を開くなど新田開発にも力を入れましたが、多摩川のはんらん^{はんらん}にたびたび苦しめられました。本格的な水田開発事業が着手されたのは、明治以降のことでした。

一方、福生、熊川一帯が尾張公のお鷹場となつてからは、鳥や獣の捕獲が禁止されたため、農作物への被害も多く、代官所から鉄砲を借り受けたり、案山子^{あかしのこ}を立てることを願う文書などが残っています。



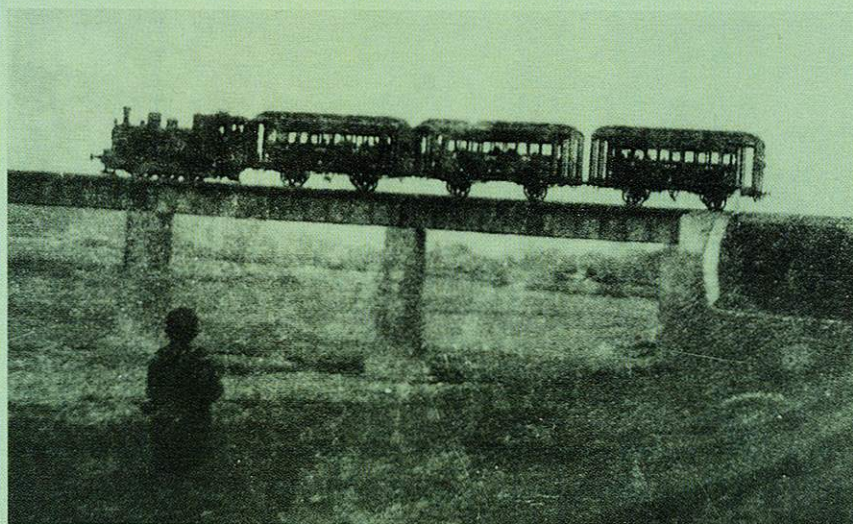
開通したころの青梅鉄道(明治28年ころ)



第一小学校開校風景(明治42年)



製糸工場(大正13年・熊川)



五日市鉄道の開通日。多摩川鉄橋を通過する列車(大正14年)



大正末期の福生駅前通り

明治時代・大正時代

大政奉還、五箇条の御誓文と明治維新によって急速に変化していく社会の中で、明治4年の廃藩置県により新たに韭山県、品川県などに属し、明治5年には神奈川県となり、さらに11年には神奈川県多摩郡となります。そして17年に福生、熊川、川崎、五の神、羽村による五ヶ村連合戸長役場が置かれるようになりましたが、その後これは分裂し、明治22年の町村制の施行により福生村、熊川村の両村で、組合役場が設置されました。

これ以来50年間、両村の共同による村づくりが行われます。この間、明治26年に神奈川県から東京府の所轄に変わり、ようやく現在の形態として落ち着いてくるのです。

教育面では、明治6年、福生第一小学校の前身、福生学舎が長徳寺本堂を借りてスタートしました。さらに、翌7年には、熊川学舎が福生院本堂を仮校舎(のち熊川神社に移転)にして授業をはじめ、大正のころまで続きました。

明治から大正、昭和へと至る福生は、養蚕を中心とした静かな農村時代が続きました。また、福生の地場産業としては、酒造のほかに、片倉製糸をはじめとする製糸工場があり、明治20年代から昭和初期にかけて最盛期を迎えました。

立川～青梅間に青梅鉄道が開通、福生駅が開設されたのは、明治27年のことです。大正4年になると、村にも電灯がともるようになり、それから6年のちには電話もひかれました。大正14年には福生～五日市間にバスが運行、また同年には五日市鉄道も開通し、福生は西多摩地区の玄関口として活況を呈してきました。

Historical Profile

Fussa has an interesting romantic history……

It is believed that people began to live in the Fussa area almost 10,000 years ago, and during the medieval era, it seems samurai also lived here. During the Edo period, Fussa was divided into Fussa village and Kumagawa village which were both under the government of the Shogunate until the end of the era. During the Meiji, Taisho, and Showa eras, Fussa whose main activity was silk worm raising, was a quiet agricultural village. After World War II military facilities were requisitioned by the American forces which became Yokota Air Base. The city of Fussa was established in 1970.

現代・市制施行まで

昭和に入ると、多摩の名物いかだ流しも姿を消すようになり、青梅鉄道は御岳まで延長されました。

昭和5年の国勢調査によると、地域の総人口は6,005人で、1,024戸になっています。その後、人口は徐々に増え続け、昭和15年11月10日に歴史を共にしてきた福生村と熊川村は、合併、福生町が誕生しました。そのときの人口は7,921人、養蚕の盛んな農村でした。

福生町が誕生する前年の昭和14年、政府により町の北部一帯約200haが接収され、多摩飛行場ができました。15年には陸軍航空審査部と陸軍航空整備学校が開校されたため、人口は急増していきます。そして、16年12月8日、日本は対米英に宣戦布告し、太平洋戦争へと突入していくのです。

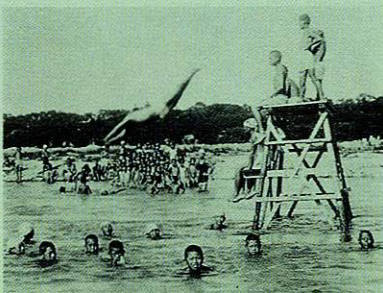
物資が配給制になり、ガソリンに代わって木炭バスが走り、若い女性も勤労働員されるなど、戦時下の影響は福生町民にも大きかったものの、農家が多かったこともあって、食糧などの面では比較的恵まれていたようです。戦争の激化につれて、19年ころからは、都心から学童が疎開してくるなど、町は戦時下の中であわただしい不安な日夜に明け暮れました。

昭和20年3月に東京大空襲がありました。4月には、熊川地区にも爆撃があり、町民2名が亡くなっています。その年の8月、日本はポツダム宣言を受諾して、戦争は終結しました。

終戦後、軍の施設は米軍に接収され、飛行場は横田基地として米軍の管理に移されました。男女同権、労働者の団結、教育の自由など、新しい時代の幕開けの中で、福生・熊川青年団が再建され、地域の復興へ向けて活動



熊川の渡し(昭和初期)



永田橋上流の多摩川(昭和2年)



熊川村風景(昭和9年)



本町2町内周辺の風景(昭和13年)



戦後もまもなく米軍が駐とんしたところの横田基地

し、その活動ぶりがNHKラジオで全国に放送されたこともありました。

昭和22年には六・三制が実施され福生中学校が開校、小学校には「母の会」もでき、早くも学校給食がはじまります。この年の人口は1万4,066人(男8,037人、女6,029人)、2,300戸でした。

戦後の福生町は基地を中心に、基地労務者、米軍相手のサービス業などが急増し、さらに米軍ハウスが約2,000戸建てられ、商店街は急速に整備されましたが、その一方で農業は年々縮小していきました。

意欲的なまちづくりにいち早く取り組んだ結果、学校校舎の新築、福生病院の開設、鉄道やバスの増設整備、道路の整備、全戸上水道の設置など、町は新しい都市の実現へ向けて近代的な環境づくりが急ピッチで進んでいきました。昭和30年の国勢調査によると、町の人口は1万9,096人で、4,137世帯でした。

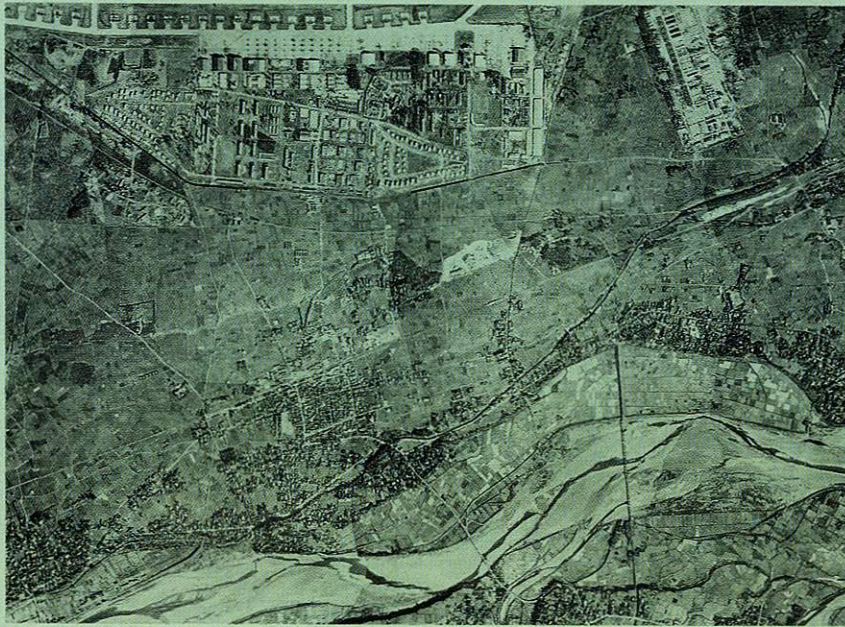
町民運動会、福生七夕祭りをはじめとする文化、スポーツ活動も年々高まりをみせ、そのための文化施設も次々と誕生していきます。32年9月には「福生町広報」も創刊され、新しいまちづくりの施策が町民に報告されるようになりました。

昭和37年には基地のまちから市民のまちへの転換が真剣に考えられるようになり、首都圏整備法による市街地開発区域の指定を受けます。また、地方から首都圏への人口流入の激化に伴い、福生への転入者も多くなってきます。翌38年には熊川南地区に東京都住宅供給公社福生住宅が完成し、15棟592戸が入居しました。

基地のまち・福生は徐々に基地活動の縮小に伴い、本来の落ち着きを取りもどした住宅都市へ移行していきました。町内には生活改善センター、電報電話局、都立工業高校など、



栄通り(市役所前の通り。昭和25年)



昭和22年撮影の航空写真(国土地理院資料)



福生駅北側から加美平地区を望む風景(昭和34年)



加美平地区(昭和41年)



田園地区の田んぼ(昭和42年)

新しい施設が毎年のようにオープンし、昭和39年1月には役場も新築されました。小学校は防音校舎として改築がすすみ、39年10月からはゴミの収集処理もはじまります。

昭和40年の国勢調査によると、町の人口は3万575人と急激に増え、小中学校、幼稚園、保育園の新設などが、町の重要課題になってきました。

経済の復興や人口の増加に伴い、かつての農村地帯の風景は年々姿を消して、都市型のまちへと変貌していきます。首都圏への通勤、通学者も年々多くなり、それを受けて駅前広場が整備され、41年12月からは福生発の東京直通電車も運行されるようになりました。42年2月から入居を開始した東京都住宅供給公社加美平住宅の完成により、さらに人口は急増し、1,042世帯が新しい住民として加わりました。

昭和43年6月、人口3万人以上をかかえ、市との行政格差に悩む全国33の町が「新市制全国期成会」を結成、市制施行の人口要件を3万人以上に改めることを目的に、2年間にわたって地方自治法の一部改正運動を続けました。その改正案が45年3月に国会で可決されたため、福生町でも市制施行への気運は一気に高まり、同年7月1日「福生市」が誕生しました。

